



解放と暴力 ——植民地支配とアフリカの現在——

小倉充夫・船田クラークセンさやか 著

東京 東京大学出版会 2018年 xviii+365 p.

本書は、南部アフリカの社会、政治、そして国際関係について研究してきた2人の研究者による共著である。本書の目的は、「解放」と「暴力」を鍵概念として、アフリカ諸国の独立後の圧政や民主化後の政治暴力を捉え直すことにある。両著者は、2012年の編著書『現代アフリカ社会と国際関係』（有信堂）において小倉氏が「植民地支配と暴力」という章を、船田クラークセン氏が『解放の時代』におけるナショナリズムと国民国家の課題」という章を執筆しており、両氏ともに本書の素地となる議論を温めてきたことが窺える。

アフリカの年と言われた1960年から70年代にかけてのアフリカ諸国の独立と国家建設は世界的な関心を集めた。その一方で、多くは頻発する政治暴力のために政治的困難に陥るか、暴力的に維持された独裁政権下で安定を保った。そして1980年代以降の新冷戦時代と冷戦終結を経て、新自由主義の今日に至る間、複数政党制の導入による急激な「民主化」が進んだ。その過程で独立後の集権的な政治システムが崩れて紛争が頻発するか、独裁政権とはまた異なる権威主義の下で新たに政治暴力を引き起こす結果になった。本書は、こうした理解のもとに議論が展開される。

本書の一つの特徴は、時としてアフリカ地域固有の事象であるかのように報じられる今日の政治暴力を、普遍的な枠組みの中で論じている点にある。この点を明示した第1部第1章では自由という普遍的原理によって暴力が正義と結び付けられ、時には革命時よりも革命後の暴力が際立ってきた史実が指摘される。この論理を現代アフリカに援用した考察は、独立後の一党支配や現代の権威主義的国家の性質を捉えている。第2部のザンビア（第4章）、ジンバブエ（第5章）、モザンビーク（第6章）の事例は、東西冷戦期の隣国の政治的選択が相互に不可分であったことを明らかにしている。ここでは、独立を先に達成した国が後続国の解放闘争の行く末を視野に、地域の安定を目指して自らの政治的選択を勘考していた様が描かれている。

本書は、政治的指導者の人物像に迫り、実務家の語りを引用することで伝わってくる当時の熱気を伝えている。特にジンバブウェに関する第5章は、2000年代以降の経済危機と強権化したムガベ政権下で出国を余儀なくされた関係者や知識人による新たな出版物に依拠し、新たな視点を付け加えている。現代アフリカ政治や国際関係に関心がある方にお勧めしたい一冊である。

網中 昭世（あみなか・あきよ／アジア経済研究所）

